

大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」

プログラムの趣旨

デジタルヒューマニティーズは、伝統的な人文学（ヒューマニティーズ）とデジタルとの有機的な結合により、人類知の取得、解釈、比較、参照、表現の方法などの再構成に取り組む分野横断的な研究・教育領域です。本プログラムは実証主義的なフィロロジー、言語研究、文化研究を基盤として学修するのに加え、文字や紙媒体だけでは不可能な資料・史料の理解やテキストの読み、エビデンスの可視化(visualization)、独創的なリサーチエスションの創成、そして方法論的共有地(methodological commons)に基づく協働(interoperability & collaboration)などを通して、人文知の新地平を切り開く取り組みでもあります。テキストや資料、史料に最新の解析技術を応用することにより、従来のリニアなアプローチだけでは不可能な現象の把握や価値の発見、エビデンスの蓄積という営みを通して、人文学データを新たな角度から読みなおすのが当プログラムが目指すところです。

プログラムの到達目標

当プログラムは、提供する講義とコースワークを通して、人文学・社会科学の資料を的確に取得、解釈、比較、参照、表現する方法を学び、ニーズに合致した情報の鉱脈を掘り当て活用する高度な「デジタルヒューマニティーズ・リテラシー」を修得することを目標とします。



授業担当教員からのメッセージ

田畑智司

人文学研究科教授／グローバル日本学教育研究拠点（デジタル日本学部門）兼任教員

令和5年度人文学林のデジタルヒューマニティーズ・プログラムでは「デジタルヒューマニティーズ（以下DH）基礎」、「DH特殊講義」の2科目を提供しました。

菅原裕輝先生と筆者が担当したDH基礎では、導入として、主にテキストデータを扱うDH研究小史を概観したのち、歴代米国大統領の就任演説集や近代日本文学コーパスを題材に、講義とハンズオンを組み合わせた授業を実施しました。DHに限らず、テキストは人文学研究の基盤となる資料形式です。テキストデータの構築に当たり、データの共用・相互利用やアカウントビリティを担保するためには、Text Encoding Initiative (TEI) という国際共通符号化規格に準拠したマークアップやアノテーションに関する知識やスキルが不可欠となります。そのため、当科目では受講生にいくつかのグループに分かれ、実際にTEI準拠のテキストコーパスを編集してもらうと同時に、そのプロセスにおいて直面する様々な難点や課題をどのようにクリアしていくべきか、実体験を通して学んでもらうことに重点を置きました。さらに、編纂したコーパスを、多変量解析に代表される統計解析法や、トピックモデリングなどの機械学習に基づくテキスト分析法、ネットワークグラフなどの視覚化手法を応用して分析・考察することで、データの中にどのような言語的、社会的、文化的現象やパターンを見出すことができるか、という問いを立て議論を深めました。

他方、DH特殊講義は、吉賀夏子先生をモデレータとして、DHの様々な分野で活躍している研究者8名がオム

ニバス形式で最先端の研究事例と知見を示すものでした。各回の講義担当者とは以下の通りです。

1. 永崎研宣先生（人文情報学研究所）「方法論の共有地としてのDH」、
2. 河瀬彰宏先生（同志社大学）「文化現象の解明に向けた音楽研究」、
3. 石井正彦先生（当研究科日本学専攻）「DHにおける分析：日本語コーパス言語学」、
4. 中島悠太先生（本学データビリティフロンティア機構）「人文学と深層学習の融合」、
5. 吉賀夏子先生「地域の歴史文書を読み解くDH：市民科学と機械学習による歴史理解支援の取り組み」、
6. 矢野桂司先生（立命館大学）「バーチャル京都で時空間を重ねる——Historical GIS, Spatial History and Spatial Humanities」、
7. 橋本雄太先生（国立歴史民俗博物館）「DH領域のシチズンサイエンス/クラウドソーシング」、
8. 北本朝展（人文学オープンデータ共同利用センター・国立情報学研究所）「DHにおける構築と共有：情報学・AI・人文学ビッグデータ」

これらの科目を通して、DHが、単にデータサイエンスを人文学史資料に適用しただけのものではなく、分野の垣根を越えた多角的、複眼的な視点から、時には巨視的に、時には微視的にデータを観察し、史資料の理解や新たなテキストの読みにつながりうるということを、少しでも受講した学生諸氏に実感してもらえたと思えば、それは担当教員の一人としてとても喜ばしいことであると思います。

受講生からのメッセージ

立野寛太

人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程

この授業では、今までにない研究の手法を習得できたことが一番の収穫だと考えています。今まで扱った経験のなかったプログラミングを用いて、大統領のスピーチや小説を定量的に分析しました。初めは題材を分析するための下準備を行い、テキストを分析するまでの過程の大変さを知りました。分析を行うと、先行研究では取り上げられなかった文章の特徴を客観的な指標で示すことができるようになりました。文章同士の類似度をグループ化したり、どのような単語が共起しているのかを検証したりし、これまでの研究では知り得なかった、言語研究を探索的・検証的に進められるようにするための手法について学ぶことができました。プログラミングや統計手法など、学際的な研究手法は独学では難しい分野であったので、経験豊富な田畑先生のサポート（予期せぬエラーへの対処など）といったサポートも手厚く、充実した環境で学ぶことができました。

肖 媛媛

人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程

デジタルヒューマニティーズ基礎を受講して、大変充実した経験を得ました。内容的には、データ抽出からトピックモデリングまで、非常に詳細かつ理解しやすい講義でした。自分の研究においても、デジタルヒューマニティーズの手法を取り入れる際の系統的な流れを把握できたことは大きな収穫でした。また、様々なアプリケーションを使って実際に手を動かすことができたのも素晴らしかったです。授業内で学んだ理論や手法を直接実践できることは、理解を深めるだけでなく、将来の研究やプロジェクトに役立つスキルを身につけることができました。これにより、将来の学習や研究において、より堅実な基盤を築くことができたと感じています。授業を通じて、デジタルヒューマニティーズがどのように構築され、応用されているかについて深く理解できました。

TAとして体験した デジタルヒューマニティーズ基礎

藤田 郁

言語文化研究科博士後期課程

「デジタルヒューマニティーズ基礎」は、デジタルヒューマニティーズ分野の研究で使われている様々なデジタルかつ定量的な手法に触れられる、有意義な授業です。理論や知識を受動的に学ぶのではなく、ハンズオン形式で実際に受講者が作業をすることで、どのような過程を経て結果が得られるのか、適切な結果を得るためにはどのような問題や課題があるのかを学ぶことができ、様々な手法を通して、研究のヒントを得られます。TAとして複数回従事し、繰り返し受講することをおすすめしたい授業でもあります。繰り返し受講することで、理解が深まるだけでなく、それまでには気づけなかった課題や結果を見出すこともできます。技術を身につけ、応用、発展させるには反復練習が必要です。他のデジタルヒューマニティーズ関連の授業と併せながら繰り返し受講することで、研究をより良く発展させるための基礎となる授業だと思います。